

令和 6 年 6 月 17 日現在

機関番号：14303

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2023

課題番号：20K00884

研究課題名（和文）英語プレゼンテーションとパターンプラクティスの有機的な連携による音声活動の充実化

研究課題名（英文）Improvement of speaking activities through combination of English language presentation and model practice

研究代表者

坪田 康（Tsubota, Yasushi）

京都工芸繊維大学・基盤科学系・准教授

研究者番号：50362421

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：外国語教室不安、Willingness To Communicate（以下、WTC）、Explicit Shyness、Implicit Shynessの指標を用いて授業前後の学生の内面の分析、Versant English Speaking Testを用いたスピーキング能力の数値的な分析を行い、外国語不安、WTCなどの情意面の改善、能力面の向上が確認できた。また、リフレクション過程を改善するために、相互評価アプリを使って、日々の活動のリフレクションを行った。これにより、各回の学生のリフレクションと過去のリフレクション記録とのつながりが促され、リフレクションの質の深まりが示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本科研では、持続的で実践的な英語音声活動の実現に資するため、遠隔地の外国語話者との協働による外国語プレゼンテーション学習と、教室での音声指導の基盤であるパターンプラクティス等の音声活動を有機的に組み合わせに関する授業デザインの提案・評価を行った。特にパターンプラクティスによる構文や語彙の強化による言語基盤の強化や文法技能の自動化と、遠隔地の外国語話者との協働による真正なコミュニケーション、動機づけの向上などの効果の相乗効果が得られる授業デザインについて検討した。また、リフレクション過程の改善のため、相互評価アプリの利用も検討し、リフレクションの質の高まりについても確認できた。

研究成果の概要（英文）：Analysis of students' inner feelings before and after class using the indicators of Foreign Language Classroom Anxiety, Willingness To Communicate (hereinafter referred to as WTC), Explicit Shyness and Implicit Shyness, and Versant Speaking Test. Numerical analysis of the students' abilities was carried out, and improvements in affective aspects such as Foreign Language Anxiety and WTC, as well as in speaking ability, were confirmed. In order to improve the reflection process, the students also reflected on their daily activities using a peer evaluation application. This promoted a connection between the students' reflections at each session and past reflection records, suggesting a deepening of the quality of the reflections.

研究分野：外国語教育

キーワード：英語プレゼンテーション パターンプラクティス リフレクション 協働学習 オンライン多人数会話

様式 C-19、F-19-1 (共通)

1. 研究開始当初の背景

テレコラボレーションは国内外で盛んに研究されており、さまざまな教育機関で実施もされているが、多くは単発的なもので、通常授業との連携などの継続的で包括的な視野のものは少ない。遠隔地の外国語話者との協働による外国語プレゼンテーション活動とシャドーイング等の音読活動の研究の過程で、両活動は相互補完的で、組み合わせによる相乗効果が期待できるとの着想に至り、両者の有機的な連携に必要な研究課題、及び、実際の導入に関する諸問題を総合的に検討することとした。

2. 研究の目的

本科研は、1. 遠隔地の外国語話者との協働による外国語プレゼンテーション学習(1)と、2. 教室での音声指導の基盤であるパターンプラクティス等の音声活動を有機的に組み合わせることにより、持続的で実践的な外国語音声活動を実現することを目的としたものである。パターンプラクティスは構文や語彙の強化による言語基盤の強化や文法技能の自動化などの学習効果が期待できる一方、意味の欠如、単調さ、現実のコミュニケーションへの転化の難しさ等の短所がある(平嶋2017)。遠隔地の外国語話者との協働による外国語プレゼンテーション学習は真正なコミュニケーション、動機づけの向上などの効果が期待できるが、カリキュラムや予算の制限等から継続的な実施や回数を確保しにくい。これら2つの活動を、省察を精緻化したモデルであるALACTモデル(Korthagen 2001)により有機的に結び、相互の活動設計に活かすことで相乗効果をうむ仕組みについて検討した。また、それぞれの活動時に得られた音声、評価、振り返りのデータを用いて評価・タスク設計支援システムの実現を試み、授業者の支援についても検討した。Figure 1に全体の概要を示す。

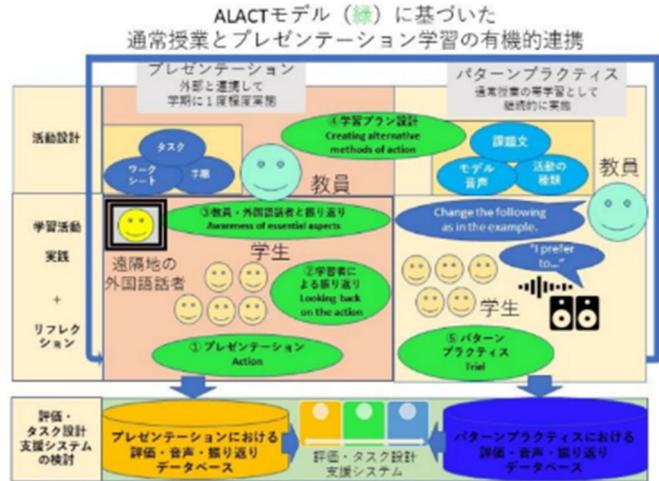


Figure 1 全体の概要

(1) 教室外の外国語話者がZoom等でリアルタイムに参加する場合(synchronous communication)と、学生の外国語プレゼンテーション動画を教室外の外国語話者が評価する場合(asynchronous communication)の2つのケースがある。

3. 研究の方法

本科研では、下記のリサーチクエスション(以下、RQ)を立て、高等教育における英語の音声学習の支援について検討した。

RQ. 英語話者との協働によるプレゼンテーションにおいて、どのような授業構成、Rubric、フィードバック法が学習者の情意的な側面、パフォーマンス向上に役立つか。

遠隔地の英語話者との協働下の、情意的な側面、パフォーマンス向上に至る授業構成要素の研究により、スピーキング活動の質及び情意面の改善が期待できる。特にパターンプラクティス等の音声活動との連携により、学習者は外国語コミュニケーションに自信を持つようになり、英語を積極的に使うようになると期待できる。このフレームワークを用いた授業を効果的なものにするために、オリジナルのオーディエンスデザインを設計した。授業が進むにつれて、オブザーバーの種類と人数を増やしていく。オブザーバーには同級生、グループ内の複数の学生、大学関係者以外のオブザーバー、教室内の受講者全員とオンライン参加の外国人英語教師などが含まれる。コースが進むにつれて、より多様で一般的でない背景を持つオーディエンスとすることで、学習者の進歩に合わせた挑戦と不安のレベルの調整を目指したデザインである。また、リフレクション過程を改善するために、相互評価アプリを使って、日々の活動のリフレクションを行った。

以下の4. 研究成果で、集中形式の授業に提案手法を導入し、情意面の分析およびスピーキングテストによりスキル向上について検討を行った結果について詳述する(Tsubota et al 2023)。

4. 研究成果

情意面の分析として、Trait Shyness Scale (Aikawa 1991)、Shyness IAT (Aikawa and Fujii 2011)、WTC (Yashima 2002)、FLCAS (Yashima et al 2009) の4つを用いた。スピーキング能力の評価としてはVersant Speaking Testを用いた。各尺度の全項目を平均し、必要に応じて逆符号化して対応する得点を算出した。シャイネス IAT については、Greenwaldら(2003)の推奨に従ってDスコアを算出した。Versantスピーキングテストについては、テストシステムに組み込まれたアルゴリズムに従って採点を行った。調査前と調査後の尺度およびテスト得点の変化は、対応のあるt検定を用いて調べた。

FLAのスコアは、受講前(M = 3.11、SD = 0.50)から受講後(M = 2.60、SD = 0.25)に有意に減少した(t(6) = 2.68、p = .04、dD = 1.01)。WTCスコアは、受講前(M = 2.62、SD = 0.69)から受講後(M = 3.13、SD = 0.55)に増加し、増加傾向が見られた(t(6) = 2.26、p = 0.06、dD = 0.85)。従って、受講後にセッションにおけるFLAが減少し、英語におけるWTCが増加したと言える。明示的シャイネスであるTrait Shyness Scaleと暗黙的シャイネスであるShyness IATのスコアには有意な変化は見られなかった。変化量は、変化後の得点から変化前の得点を引いたものであるため、明示的シャイネス、暗黙的シャイネス、FLAではマイナスの値が好ましい変化を示している。WTC尺度ではその逆で、変化量がプラスの場合に好ましい変化が観察されたことを示している。結果をTable 1に示す。

また、Versant Speaking Testの各サブスケールについて、調査前と調査後のスコアの変化を確認するため、対のt検定を用いて分析した。流暢さ(Fluency)のスコアは、受講前(M = 32.83、SD = 9.11)から受講後(M = 36.50、SD = 8.41)に増加し、増加傾向が見られた(t(5) = 2.56、p = 0.05、dD = 1.05)。発音スコア(Pronunciation)も受講前(M = 31.17、SD = 2.32)から受講後(M = 37.00、SD = 7.43)に増加し、増加傾向が見られた(t(5) = 2.07、p = 0.09、dD = 0.84)。さらに、文章構文スコア(Sentence Mastery)は、受講前(M = 41.83、SD = 7.83)から受講後(M = 47.83、SD = 7.00)に有意に増加した(t(5) = 7.35、p < .01、dD = 3.00)。語彙(Vocabulary)のスコアは、受講前(M = 42.83、SD = 8.54)から受講後(M = 48.17、SD = 9.58)に有意に増加した(t(5) = 2.70、p = .04、dD = 1.10)。明瞭度(Intelligibility)も受講前(M = 2.83、SD = 0.41)から受講後(M = 3.17、SD = 0.41)にわずかに上昇したが、この変化は有意ではなかった(t(5) = 1.58、p = 0.17、dD = 0.65)。総合スコア(Overall)は、受講前(M = 37.17、SD = 6.21)から受講後(M = 42.33、SD = 5.92)に有意に増加した(t(5) = 5.92、p < .01、dD = 2.42)。変化量は事後スコアから事前スコアを差し引いたものであるため、プラスの変化は参加者のスピーキング能力の改善を示す。この結果をTable 2に示した。

続いて、各尺度の参加者の得点と変化量を計算し、Table 3に示した。同じ手順をVersant Speaking Testの得点にも適用し、結果をTable 4とTable 5に示した。Versant Speaking Testについて扱ったTable 2、Table 4、Table 5から、参加者全員(Versant Speaking Testを受験できなかった参加者No. 1を除く)が、ほとんどの下位尺度のスコアを向上させたことが分かる。つまり、本研究で設計・実施したコースは、参加者のスピーキング能力の向上に十分な効果があったと判断できる。

一方、明示的・暗黙的シャイネス、WTC、FLAの変化は、かなりばらつきがあった(Table 3参照)。そこで、担当教員によるモニタリング結果についても検討した。ここでは「明示的シャイネスとFLAが大幅に減少し、WTCが大幅に増加した」No.5の学生と「明示的シャイネスとFLAがわずかに減少した」No.4について取り上げる。なお、「大幅な」とは、平均値から+1標準偏差以上、変化した場合を指している。

4年生のNo.5は、おとなしく目立たない学生だったが、振り返り活動でのスピーチでは、論理的に考えていることがよくわかり、毎日の授業の最初に立てた目標も明確だった。最終日のスピーチでは、プロ野球選手についてビデオを見せたり、モノマネをしたりしながら熱く語っていた。彼はアンケート後の感想で、「他の生徒と話せて楽しかった」と述べている。他の参加者が話しやすいように席の配置を提案するなど、コミュニケーションをとろうとする姿勢がうかがえた。

同じく4年生のNo.4は、口数は少ないものの、アイコンタクトが取れていたり、声が落ち着いていたりと、自信を持って話している印象を受けた。初日は声が小さく、半分しか聞き取れなかった。私は彼に、少し声を大きくするだけで、大きな印象を与えることができるのだから、もっと大きな声で話すように頑張るべきだとアドバイスもした。その際、彼はもう声を大きくすることはできないと答えた。最終日、他の学生たちから「初日より声が大きくなっている」と指摘された。自分でも気づかぬうちに声が大きくなっていったようだ。最初は、このクラスで自分は受け入れられていないと感じていたようだが、他の学生から予想以上に好意的なコメントをもらったためか、途中から積極的になったようだ。太陽系外惑星など、他の学生が単語すら知らないようなややこしい話題を好んで話し、時には「こんなことも知らないんですね。」というようなコメントを他の学生にすることもあった。アンケート後のフィードバックでは、他の学生と「特に話しやすい、話しにくいとは感じなかった」とし、外国人英語教師とのやり取りについては、「Not so bad」と

コメントするのみであった。

以上の教師によるモニタリング結果から、次のことが言える。No. 4の生徒は、他の生徒や外国人英語教師とのコミュニケーションをあまり楽しんでいないようであった。この結果はTable 3の結果と一致している。したがって、他の受講生や外国人英語教師とコミュニケーションをとり、互いに評価し合い、自らの英語スピーキング力を向上させるというこの講座を純粋に楽しめたかどうか、受講生の心理的变化に影響している可能性がある。

テレコラボレーションにおけるコミュニケーションに失敗する原因として、「楽しさ」の低下も挙げられる。受講者が純粋にコースを楽しめるかどうか心理的な変化に影響するとすれば、最初はコースにあまり興味がなかった受講生も、コースに興味を持ち、他の受講生とのコラボレーションに積極的になるようなサポートを教師がすれば、コミュニケーションが成功する可能性もある。また、他の生徒がサポートする雰囲気も重要であろう。実際、受講生No. 4は、コース最終日に「自分の声が聞き取りやすくなったというコメントが聞けてよかった。」というコメントを相互評価アプリで記していた。このような肯定的なコメントがコースの早い段階で得られていれば、この学生のコースへの取り組み方はより積極的なものになっていた可能性がある。早い段階から受講生が楽しみを得られるような方策を探る価値はあるだろう。

Table 1. Amount of change in each scale score

	Pre	Post	<i>t</i>		<i>df</i>	<i>p</i>	<i>d_D</i>
Explicit Shyness	2.58	2.52	1.45		6	.20	0.55
	(0.42)	(0.48)					
Implicit Shyness	0.13	0.36	0.61		6	.56	0.23
	(0.62)	(0.76)					
Willingness to Communicate	2.62	3.13	2.26	†	6	.06	0.85
	(0.69)	(0.55)					
Foreign Language Anxiety	3.11	2.60	2.68	*	6	.04	1.01
	(0.50)	(0.25)					
† <i>p</i> < .10, * <i>p</i> < .05.							

Note: Standard deviations are shown in parentheses below the mean.

Table 2. Amount of change per subscale of the Versant Speaking Test

	Pre	Post	<i>t</i>		<i>df</i>	<i>p</i>	<i>d_D</i>
Fluency	32.83	36.50	2.56	†	5	.05	1.05
	(9.11)	(8.41)					
Pronunciation	31.17	37.00	2.07	†	5	.09	0.84
	(2.32)	(7.43)					
Sentence Mastery	41.83	47.83	7.35	**	5	<.01	3.00
	(7.83)	(7.00)					
Vocabulary	42.83	48.17	2.70	*	5	.04	1.10
	(8.54)	(9.58)					
Intelligibility	2.83	3.17	1.58		5	.17	0.65
	(0.41)	(0.41)					
Overall	37.17	42.33	5.92	**	5	<.01	2.42
	(6.21)	(5.92)					
† <i>p</i> < .10, * <i>p</i> < .05, ** <i>p</i> < .01.							

Note: As the *p*-value for fluency is slightly above 0.05, it is marked as †; as the pre-test value of the Versant Speaking Test for one student was not obtained, the degree of freedom was set to 5; standard deviations are shown in parentheses below the mean.

Table 3. Scale scores and the amount of change in each scale for each participant

Participant	Explicit Shyness			Implicit Shyness			Willingness to Communicate			Foreign Language Anxiety		
	pre	post	amount of change	pre	post	amount of change	pre	post	amount of change	pre	post	amount of change
1	2.75	2.75	0.00	-0.34	-0.70	-0.36	3.33	3.75	0.42	3.18	2.88	-0.30
2	2.13	2.13	0.00	0.33	-0.04	-0.37	2.00	2.00	0.00	3.48	2.85	-0.64
3	3.06	3.13	0.06	0.32	0.88	0.56	2.58	3.33	0.75	2.61	2.67	0.06
4	3.19	3.13	-0.06	-0.50	-0.38	0.12	3.17	3.08	-0.08	2.48	2.30	-0.18
5	2.44	2.25	-0.19	0.27	0.95	0.68	1.83	3.33	1.50	3.45	2.21	-1.24
6	2.19	1.94	-0.25	1.07	-0.38	-1.45	3.42	3.42	0.00	2.76	2.61	-0.15
7	2.31	2.31	0.00	-0.02	0.79	0.81	2.00	3.00	1.00	3.79	2.67	-1.12

Table 4. The Versant Speaking Test scores and change per participant

Participant	Fluency			Pronunciation			Sentence Mastery		
	pre	post	amount of change	pre	post	amount of change	pre	post	amount of change
1		32			24			36	
2	29	34	5	29	36	7	28	37	9
3	32	34	2	30	33	3	40	43	3
4	30	33	3	32	34	2	51	57	6
5	29	29	0	32	28	-4	42	49	7
6	51	53	2	35	49	14	47	52	5
7	26	36	10	29	42	13	43	49	6

Table 5. The Versant Speaking Test scores and change per participant (continued)

Participant	Vocabulary			Intelligibility			Overall		
	pre	post	amount of change	pre	post	amount of change	pre	post	amount of change
1		38			3			38	
2	32	31	-1	3	3	0	29	35	6
3	48	57	9	3	3	0	37	41	4
4	51	56	5	3	3	0	41	45	4
5	36	45	9	3	3	0	35	38	3
6	52	52	0	3	4	1	47	52	5
7	38	48	10	2	3	1	34	43	9

Note: Participant No. 1 was unable to take the pre-Versant Speaking Test due to an equipment malfunction, therefore, no record exists.

参考文献

- 平嶋 里珂 (2017). “コミュニケーション能力を養成するためのパターンプラクティス”, 関西大学外国語教育研究, 第13号, 79-85
- Fred A. J. Korthagen, F.A.J. (2001). Linking Practice and Theory: The Pedagogy of Realistic Teacher Education (邦訳) 武田信子・今泉友里・鈴木悠太・山辺恵理子 (2010) 『教師教育学—理論と実践をつなぐリアリスティック・アプローチ』, 学文社
- Greenwald, A. G., Nosek, B. A., & Banaji, M. R. (2003). Understanding and using the Implicit Association Test: I. An improved scoring algorithm. *Journal of Personality and Social Psychology*, 85(2), 197-216. <https://doi.org/10.1037/0022-3514.85.2.197>
- Aikawa, A. (1991). Tokusei shyness shakudo no sakusei oyobi shinraisei to datousei no kentou ni kansuru kenku [A study on the reliability and validity of a scale to measure shyness as a trait]. *Japanese Journal of Psychology*, 62(3), 149-155. <https://doi.org/10.4992/jjpsy.62.149>
- Aikawa, A., & Fujii, T. (2011). Senzai rengou test (IAT) wo mochiita senzaiteki shyness sokutei no kokoromi [Using the Implicit Association Test (IAT) to measure implicit shyness]. *Japanese Journal of Psychology*, 82(1), 41-48. <https://doi.org/10.4992/jjpsy.82.41>
- Yashima, T. (2002). Willingness to communicate in a second language: The Japanese EFL context. *The Modern Language Journal*, 86(1), 54-66. <https://doi.org/10.1111/1540-4781.00136>
- Yashima, T., Noels, K., Shizuka, T., Takeuchi, O., Yamane, S., & Yoshizawa, K. (2009). The interplay of classroom anxiety, intrinsic motivation, and gender in the Japanese EFL context. *Journal of Foreign Language Education and Research*, 17, 41-64.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計12件（うち査読付論文 3件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 Yasushi TSUBOTA, Tsutomu INAGAKI, Takayuki NOZAWA, Yasushige ISHIKAWA	4. 巻 なし
2. 論文標題 A Study of New English Presentation Lessons Using Online Reflection Forms with the Pandemic: Adaptation of Speech Instruction, Experience Sharing and Systematic Reflection	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Proceedings of the 24th International Conference and Workshop on TEFL & Applied Linguistics	6. 最初と最後の頁 pp.197-206
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 杉本 喜孝, 坪田 康	4. 巻 なし
2. 論文標題 英語スパイラル型学習に向けたICT教材開発と活用実践について - 多読・速読・音読の授業内実践とフィードバックとともに -	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 言語学習と教育言語学:2022年度版	6. 最初と最後の頁 pp.9-21
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 坪田 康, 杉本喜孝	4. 巻 Vol.122, No.304
2. 論文標題 オンラインフォームによるリフレクションを活用した英語スパイラル型学習の一検討 ~ 教員による音声指導の適応・学習者同士の経験の共有・システムティックなりフレクションの導入 ~	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 信学技報	6. 最初と最後の頁 pp.37-42
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 富田 英司, 坪田 康, 河村 泰之	4. 巻 69
2. 論文標題 愛大Minecraft 事業の効果に関する初期報告 - 発達支持的生徒指導への示唆 -	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 愛媛大学教育学部紀要	6. 最初と最後の頁 pp.1-10
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 坪田 康, 富田英司	4. 巻 Vol.122, No.103
2. 論文標題 Interactive Digital Narrativeの教育利用についての一検討	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 信学技報	6. 最初と最後の頁 pp.24-29
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 坪田康・富田英司	4. 巻 vol. 121, no.87
2. 論文標題 オンライン外国語コースの多人数会話を対象としたDiscord botによる音声収集・分析	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 信学技報	6. 最初と最後の頁 9-12
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 坪田康・富田英司	4. 巻 vol. 121, no.308
2. 論文標題 Minecraftの英語教育への応用可能性	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 信学技報	6. 最初と最後の頁 1-6
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 富田英司・坪田康	4. 巻 vol.121, no.308
2. 論文標題 MinecraftとDiscordを用いた放課後支援事業の効果：愛大Minecraftの事例	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 信学技報	6. 最初と最後の頁 14-36
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 坪田康・富田英司	4. 巻 vol.121, no.440
2. 論文標題 創発的物語を促す教育的虚構空間の構成について	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 信学技報	6. 最初と最後の頁 74-79
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 杉本喜孝・坪田康	4. 巻 vol.121, no.308
2. 論文標題 英語多読および口頭レポートのリフレクションに基づく音声活動・読解活動の充実化の検討 ~ 授業外多読活動と授業内活動を有機的につなぐグループ構築のための一検討 ~	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 信学技報	6. 最初と最後の頁 25-29
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大石若奈・富田英司	4. 巻 Vol.120, no.304, TL2020-15
2. 論文標題 学生主導プロジェクト実践を通したリフレクションの深化	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 信学技報	6. 最初と最後の頁 17-19
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Tsubota Yasushi, Inagaki Tsutomu, Nozawa Takayuki, Ishikawa Yasushige	4. 巻 None
2. 論文標題 A Pre-Telecollaboration Training Course for Japanese EFL Learners	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Telecollaboration Applications in Foreign Language Classrooms	6. 最初と最後の頁 23 ~ 44
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.4018/978-1-6684-7080-0.ch002	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計9件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 Eiji Tomida, Yasushi Tsubota
2. 発表標題 A Case Study of Virtual Field Experience in Minecraft
3. 学会等名 The 31st Japan-U.S. Teacher Education Consortium, Teacher Education in a Pandemic: International Perspective from Japan and U.S. (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 坪田康・富田英司
2. 発表標題 虚構空間を活用したデジタル時代の倫理教育について
3. 学会等名 次世代大学教育研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 坪田康・富田英司
2. 発表標題 オンライン放課後支援活動における録音・分析方法に関する一考察
3. 学会等名 次世代大学教育研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 杉本喜孝・坪田康
2. 発表標題 多読・速読・音読活動のリフレクションを活用した英語授業設計法の一検討：経験学習サイクル導入による学びの促進を目指して
3. 学会等名 次世代大学教育研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 坪田康・富田英司
2. 発表標題 オンライングループワークにおける録音ログの活用法の検討
3. 学会等名 次世代大学教育研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 坪田康
2. 発表標題 教育的虚構空間における意味的交渉：プロテウス効果を中心に
3. 学会等名 次世代大学教育研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 坪田康
2. 発表標題 受けることが楽しみになるオンライン授業を目指して：WritingとSpeakingの授業実施の経験から
3. 学会等名 第171-bis回次世代大学教育研究会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 水本武志・坪田康・森下美和・原田康也
2. 発表標題 オンラインで話し合いを定量化し可視化する
3. 学会等名 早稲田大学情報教育研究所主催思考と言語研究会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 原田 康也・赤塚 祐哉・坪田 康・鍋井 理沙・森下 美和
2. 発表標題 オンライン授業における学生間のインタラクション（相互作用）と全人的な交流機会の担保
3. 学会等名 2020年度日本認知科学会第37回大会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 Ishikawa, Y., Tsuboto, Y., Umemoto, T., Murakami, M., Kondo, M., Suto, A., & Nishiyama, K.	4. 発行年 2020年
2. 出版社 Springer International Publishing	5. 総ページ数 13
3. 書名 Building Student Interactions Outside the Classroom: Utilizing a Web-Based Application in a University Flipped Learning Course for EFL Learners	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担者	ヒーリ サンドラ (Healy Sandra) (10460669)	京都工芸繊維大学・基盤科学系・准教授 (14303)	
研究 分担者	石川 保茂 (Ishikawa Yasushige) (90257775)	京都外国語大学・外国語学部・教授 (34302)	
研究 分担者	富田 英司 (Tomida Eiji) (90404011)	愛媛大学・教育学部・准教授 (16301)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	森 真幸 (Mori Masayuki) (90528267)	京都工芸繊維大学・情報工学・人間科学系・助教 (14303)	
研究分担者	杉本 喜孝 (Sugimoto Yoshitaka) (40912423)	帝塚山学院大学・リベラルアーツ学部・准教授 (34423)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関